

郷中教育の完成(上)

安藤 保

(平成四年十月十五日 受理)

The Accomplishment of Gōjyū-Kyōiku (A Traditional System of Education in SATHUMA-HAN)

Tamotsu ANDO

- 一、問題の所在
- 二、斉興晩期の文武の振興策と郷中の実態(以上本巻)
- 三、斉彬期の文武振興の基本姿勢(以下次巻)
- 四、城下・外城における文武振興の実態
- 五、むすび

一、問題の所在

近世初頭から武士の二才共による集団行動は、身体の鍛練としては重要な役割を果たしていたが、武士としての精神修養としての面は著しく劣っていたことは、元禄期に、この集団に加わった横山長右衛門の日記に、「正月より十二月廿九日迄一日も無滞、夜白二才咄と名付野山を懸行申候、間々には手習学文弓兵法仕候事」と、野山を駆け回ることに代表される身体の鍛練を事とし、その合間に学

文等を習うとあること、また、歴代の藩主により、繰り返し若者に対する学文の奨励、風俗の立ち直りを命ずる法令が出されていることにより窺われよう。

特に、島津重豪は、二才の粗野な身なりや行動に関する矯正令を度々發布し、急進的な「都化政策」を展開すると共に、造士館・演武館を建て藩校による教育を進めた。

重豪は武家の子弟教育として、二才の集団行動を中心とする伝統的教育を否定し、藩校を中心とした封建的官僚養成を頂点とする官教育を重視すると共に、封建的支配関係、および家族関係を利用して子弟の教育の徹底を図った。このような、重豪による藩士の子弟教育の基本方針は、藩主を退いた後も保持し続けた強力な影響力により、彼の在世中には変化することはなかった。

従来、郷中教育は、藩主の期間だけではなく影響力を保持する期間も含めてはいるが、重豪の治世期に完成するとされていた。また、

島津斉彬襲封前後の郷中教育はつぎのようであると理解されている。

松本彦三郎氏は、著書『郷中教育の研究』において、斉彬襲封前の状況を「郷中の二才たちの間には、暴慢無礼を働いて剛氣と心得違し、喧嘩抗争を為して勇猛と見誤り、粗傲不遜の言行を以て士風と誤信する悪風が流行横溢し、之をそのままに放置することが許されなくなった」としており、そのため、斉彬は襲封後すぐさま「訓条」や「城下士風矯正の論達」を出し、諸役人の執務の心得、諸士の文武の修行、士以外の庶民にたいして家業の出精、風俗の立ち直りを命じた。これにより、「此の令が布達されるや、各組頭は配下の庶士^(諸カ)を会して、親しく其の趣旨を解説し嚴重に訓戒を加えた。また各郷中に於ては、人物を選抜し、時時席を設け、子弟をそこに集めて親しく教戒せしめ、苟も礼に叶はざれば行はず義に中らざれば語らずの決意を促がし、更に各自に誓文を上らしめ、専ら文武に精進し忠孝を奨励し、此の約に悖ることのなきやう強く覚悟せしめた。而して之に背くものは郷中の二才たることを拒絶し、知友の交誼を絶つたのである。これにより士風は大いに改まるに至った」とされるのであり、その結果、「斉彬公の時代に至って、郷中掟が或は反省せられ或は改正せられたことは、郷中それ自身の充実整備を意味するのであって、郷中教育は、此の公の時代に於て最も絢爛たる花を開き、儕儕たる多士彬彬として輩出し、藩公を中心し、打拳つて、維新の皇謨に身を挺して翼賛し奉り、皇国教育としての大成果を、真に遺憾なく發揮したのである」とされている。

すなわち、斉彬襲封前の士風の衰えを指摘し、斉彬の襲封後の諸訓諭等によりそれが改まり、特に、郷中に関しては、訓諭の趣旨に

応じて「郷中掟」も改正され、充実した活動が展開されたことが明治維新を推進した人材を生み出した理由であるとするのである。

右の松本氏の斉彬期における郷中の評価は、昭和十五年刊行の『鹿兒島県教育史』に既に現れている評価を受け継いだものである。すなわち、「郷中の刷新」の節で、「近年士風の頹れたると共に郷中も紊れ来たれる風ありとて強く之を戒め且つ番頭及び父兄等が之を等閑に処し居るを歎かれ以後斯かることなきやうにと注意を喚起される所があった」と、士風の乱れを戒める訓諭が出された結果「各郷中共今更の如く恐懼し或は規約の修正をなし或は新規制定を行ひ各郷中競つて気風の立直に当らんことを誓つた為一時衰廢に陥つていた城下子弟の風紀は次第に緊張を見るに至った」と論じている。さらにそれに続く「立直後の郷中」では、この郷中刷新の布令により郷中の面目を一新するに至ったとし、その現れとして、各郷中が共通に努力実施した主な事柄を次のように列挙する。

- 1 争闘喧嘩の防止に力めた。このため、各郷中とも稚児など外出の時は、二才が責任をもって監督引率に当たる。
- 2 読書習字の風が盛んになって来た。これは、稚児の早朝の素読、家庭における「日新公のいろは歌」等の暗唱、二才の四書五經への精通、軍書の輪読等を内容とした。
- 3 武術の稽古、郷中での運動による身体の鍛練。
- 4 「幣立」等による胆力の養成。
- 5 「詮議」による判断力の養成。
- 6 自治制裁の厳。長上の命に服さず、また掟に背く者へは、理由を吟味して程度に応じ厳格な処罰を行ない、最後の処分として義絶が宣告される。これらの処罰は、先輩・藩吏等を煩

わさず、自治的制裁が行われた。

これらの事柄を実践するために、稚児・二才それぞれに所定の日課があり、式日、式夜の行事が定められていた。

以上のように、『鹿児島県教育史』では、いわゆる典型的な郷中教育の内容として知られる多くが、斉彬期の郷中の刷新を契機として出てくるか、または調えられたと理解しているのである。

郷中教育の研究に関し、このように、斉彬期を重視する論法は、戦前の研究に留まらず、以後も踏襲されている。

『鹿児島市史』では、重豪の文化政策、造士館の創設による指導者の養成と、郷中教育の弊害の緩和を図らせた政策も十分な成果を挙げなかったことを指摘した後で、「やがて郷中教育と藩校における教育とが調和して、大きな成果をあげたのは斉彬の改革以後のことである。(略) 斉彬は鋭意藩政改革に努力した。教育関係では造士館教育の改善に努め、あわせて郷中教育の改善にも着手した。すなわち、嘉永五年の訓令がそれである。同年十月に制定された『下荒田郷中掟』は、斉彬の同訓令直後のものであり、訓令の趣旨がみごとに生かされていることがわかる」と、斉彬襲封前の教育政策は成果をあげえなかったが、斉彬期の教育改革により、造士館教育と郷中教育が相俟って教育の成果が上がったとし、それが維新时期における人材輩出の一理由であることを示唆する。

このことは、『郷中教育の歴史』で、原口泉氏が、「島津斉彬は下級武士層を政治的に活用した。人材を養成し、郷中を相互研修の場として活性化したといえる。斉彬によって郷中の党派化、朋党化は政治的方向性が与えられ、薩摩藩は明治維新の推進力たりえたと考えられる。郷中に教育的・政治的意義が付与されたのは、この時で

ある」と、郷中教育の歴史における斉彬期の意義と、役割について明確に指摘している。さらに、『薩摩の郷中教育』では、「郷中教育の精華」の章が設けられていることからでも分かるように、郷中教育に対する手放しでの賛辞が与えられているのである。

以上のように、斉彬襲封前後の郷中教育に触れた先行研究を整理する時、先行研究に共通する傾向と、そこから当然出てくることではあるが、問題意識として欠如している面を指摘することができる。

第一は、斉彬期を「郷中教育の完成期」とし、また、成功を収めた「郷中教育の改革」として評価することに視点が置かれているために、斉彬襲封前の状況について十分な検討がなされていないことである。例えば、筆者はこの論の立場を取らないが、先に触れたように、郷中教育は重豪期に成立すると従来されている。この立場の論では、高い評価の与えられる郷中教育が重豪期に成立した後、一度士風の衰微をきたし、斉彬期に士風の立て直しがなされるということになる。しかし、斉彬期の改革の成果を高く評価するには、当然のことながら、襲封直前の士風・風俗等に対する藩の施策と、斉彬期の施策との違いを明確にすると共に、指摘されている士風の衰微の状況、あるいは「郷中教育」の実態について明らかにする必要があるのであるが、これについては具体的には触れられていない。

第二には、斉彬期に出された訓諭等の法令の趣旨を汲み入れた郷中掟として知られている「下荒田郷中掟」に、「郷中の完備した姿」を見ているために、法令・掟の、「こうあつてほしい」とか、「こうあるべきである」という、法令の発布者、あるいは掟の制定者の意図が、そのまま実態として現出していると理解しているように思われる。云うまでもなく、法令・掟の内容と現実の間には、程度の差

はいろいろであるが、隔たりがあると解釈しなければならぬ。そのためには、斉彬期の郷中における稚児・二才の実態を検討することが必須であろう。また、「郷中教育の完成」により、何が徹底され、何が欠けることになったのかを斉彬の意図と合わせ検討する必要がある。斉彬期に実質的な家老を勤め、斉彬の意図を完全に承知していたと云える鎌田正純が、藩士のあるべき姿について次のように云っていることは、その意味で注目される。

一上ヨリ一度令ヲ降候儀ハ、端々末々迄モ信服イタシ、万事ノ制度易簡ニシテ、上下信義ヲ不失、義ヲ見テ利ヲ忘レ、礼儀廉恥ノ士風ニ候ヘハ、博学多才ノ士少ク候テモ、可相済哉之事

一儉素ヲ専ニシテ国家ヲ富シ、武士タルモノ格位ヲ失ハス、兵食ヲ足シ、常ニ艱苦ヲ不厭、弓馬・刀槍・銃砲等研究ハ勿論、山・

川・海之險難ニ心身ヲ鍊リ、操練ノ組立ニハ銃砲ヲ専ニシ、中ニ弓馬刀槍其為長所ヲ以手詰ニ相備、座作進退ノ相図モ一度耳目ニ触候時ハ、衆勇奮撃ノ品相用可然哉之事⁽¹⁾

すなわち、命令が下れば、それを遵守して実行するとの士風を確立すれば、博学多才の武士は沢山は必要ではないのかと云うのであり、その次の史料と合わせ見れば、忠勇の兵の養成を意図していることが知られるからである。

第三には、斉彬期の郷中教育の結果が、直接維新期に輩出する人材の源となつていとの理解がなされている。八年間斉彬が藩主の座にあつた後、薩摩藩の政情は大きく変わり、斉彬の着手した諸事業も、縮小、廃止されることも多かった。このような藩政の変化は、武士の意識に影響を与え、それは郷中教育にも影響を与えざるをえなかったであろう。斉彬期の郷中教育の推移と、斉彬期に形作られ

た郷中教育が、厳密な意味で、人材の養成にどのような役割を果たしたかの検討を抜きにして、斉彬期の郷中教育を人材の輩出と結び付けることは、短絡した論理との譏りを免れないであろう。

先行研究を、右のように批判的に見、指摘した視点から関係する諸史料を考察することにより、初めて郷中教育の真実に迫ることができるであろう。したがって、本論では、以下、一、斉興晩期の文武の振興策と郷中の実態、二、斉彬期の文武振興の基本姿勢、三、城下・外城における文武振興の実態、について検討する。

二、斉興晩期の文武の振興策と郷中の実態

島津斉宣は、樺山主税・秩父太郎を登用して重豪の政策の方向転換を図つたが、重豪の逆鱗に触れ「文化朋党事件」による多数の犠牲者を出した末、文化六年藩主の座を斉興へ譲つた。斉興の治世の初期は重豪の政務介助の下に、文武の奨励、諸士の容貌・言語・風俗の矯正令が相次いで発せられており、その徹底の意思は、血判の請書の提出がもとめられていることにも現れている。⁽²⁾

しかし、このような達がどのように守られたかは判然としない。ただ、理由は分からないが、文化期を境として同様の内容を持つ達等が少なくなったことは注目される。「文武芸術ノ儀ニ付、文政・天保ノ度相達候趣」とあることから、文武芸術の奨励が文政期にも出されていることが知られる。文政度の史料は末見であるが、次に示す天保度のものとはほぼ同様なものだったのでなかろうか。

天保七申年文武芸術ノ儀平常ニ相替候儀ハ勿論ノ事ニ候ヘ共、何レモ御奉公一廉御用立候様之心得ニテ師業可有之候、依之稽古モ

実意ニ出精、且今日ノ形勢ヲ以テ習候ハ專要ノ義ニ候、毎々相達候趣弥以テ不怠、頭支配ニテモ油断無之世話可致候、

別段達書覚

諸稽古場近來風儀不宣向モ有之哉ニ相聞、畢竟師弟トモ深切薄キヨリノ事ニテ、教候者モ致修業候者モ、互ニ実意精入候義可為專要ト、夫々頭支配ヨリ不怠候様可致教候、

文武ノ道常々相嗜候ハ勿論ノ義ニテ、追々御世話モ有之趣無違異、當時別テ出精之由ニハ相聞候ヘトモ、猶此上無油断可致修業義專要ノ事ニ候、依之先年相達候書付別紙申達候間、於頭支配不怠心付、稽古相励候様厚教育可被致候、此段向々ヘ可被達候

別紙 従公儀御諭達相成候ニ付不洩様向々ヘ無屹度可申達候、

八月

御家老座印⁽³⁾

この史料は、最後の行に明らかなように、公儀の諭達が中心をなしていることからすれば、薩摩藩独自の必要から文武・芸能・風俗の奨励令、矯正令が出されていた重豪期とは異質の状況といえよう。重豪の影響から初めて離れ、斉興独自の治世が行われているこの期は、文教策としては一種の空白の期間といえるのではなからうか。

このような状況に変化が生じるのは、天保八年、山川ヘイギリス船が渡来し、また、弘化元年以降琉球へ英・米・仏の船が渡来して外交を求める等、外国の圧力が薩摩藩にひしひしと感じられてくるようになったことによるが、これらに対応するため、薩摩藩では、制度や軍法の改編、給知高改正により軍事動員人数の確保等、軍備の強化が図られた。併せて、武士の士気振作の方策が講じられた。次の史料は、「御軍備ノ儀御手ヲ被付候ハ、如何様ニ御仕懸有之可宣哉存慮申上候」との、海老原宗之丞よりの要請に応えた安田助

左衛門の上申書である。⁽⁴⁾

此節ノ儀第一上様御ハマリニ被為依候御事ニテ、タトヘテ申上候ヘハ近年ノ諸向御改革・田地御改正等ニ上様ハ申上ニ不及、御家老方御始諸御役場一向ニハメ付候処ヨリ、十二八・九ハ御功業御成就相成候、夫ヨリ又格別ニ御配慮被遊トノ御趣意諸士一統奉感佩処至極ノ儀ニテ実以基本ト奉存候、

一 懶惰ノ風ヲ直シ士氣ヲ奮發セシムルハ、文武ノ芸ヲ学ハシメ風俗ヲ一新セントハ、十人カ十人目ヲ付ル処ニテ、其通りノ事ニハ候ヘトモ、文武ノ芸ヲ学ヘト被仰渡トテモ、有志ノ士又ハ若輩者共ハ承知モ可致候得共、壮年以上両道共取捨居候者共ヘハ詮立兼可申、勿論教育ノ道文武両道ヲ以御仕立有之外ハ無之候ヘ共、初発御手ヲ被下処肝要ノ御事奉存候間、士氣勃興イタス処ハ諸士一統ヘ響渡リ候様ノ儀無之候テハ相成申間敷、御関狩トカ士躍トカ申様成惣体ノ人数鼓舞踊躍スル処ノ御取扱有之、其外勲功ノ家筋相絶居或ハ零落ヲ御取建被成下、拔群ノ逸士ハ御挙用有之英雄ノ心ヲ御覽被成度奉存候、

一 風俗御改正士ノ氣勃興イタス処ノ仰出屹ト有御座度、尤其中ニハ文武ノ両道ヲ被為重候テ被仰渡、懶惰利欲ノ風俗相止ミ候様御実意ヲ以被仰渡、銘々肺肝ニコタヘシミ入候様ノ仰渡振モ可有之、其節御代々様御袖判ヲ以テ被仰出置候知行高致混雑居、当分ニテハ御軍役モ出来兼、其上内々ニテ過分買入居候者共、表向ハ小高ノ筋ニテ御役料等申受不埒ノ処御叱有之、急度被復御旧規知行高ク大切成事諸士一統相心得候様分テ被仰渡度奉存候、

一 御掛リ御家老笑左衛門様ハ不及申ニ、外ニ御一人篤実重厚ニシ

テ御家柄ノ御方、是ハ第一人望ノ入処、大目附衆是モ人望ノ処
肝要奉存候、

一右之通り御取扱有之候テ、夫々文武ノ心得有之者ハ御褒美等有
之候モノヲツカテ威愛並行ハルノ場ニ相成可申候、

右愚案ノ次第乍恐申上候、以上、

末正月十日

安田助左衛門

右の上申書で安田が指摘することは次のことである。

一つは、士気の奮発のため文武奨励による風俗の一新が重要であることを認めながらも、これは「有志ノ士」や若輩には受け入れられるであろうが、壮年以上の「両道取捨居候者」には効果がないとし、全体の士気勃発のために、関狩や士踊り等、武士全体が参加できる訓練行事を導入すべきであるとする。その背景には、文武の芸を学べと命じて一部者にしか受け入れられないこと、壮年の者は文武の芸を放棄している者が多いという薩摩藩の教育の実態があったことは注目される。

二つは、絶家となっているか、零落している勲功の家柄の家の再興と、人材の拔擢登用である。これにより、島津家への旧勲功すらも重視する姿勢を示し、更に人材の拔擢登用による新たな恩の付与により、忠義心を煥発させ、奉公の重要さを示すと共に、文武の芸道の有効性を示し、これに向かわせようとするものであった。

三つは、武士の生活基盤であり、かつ軍役の基盤でもある知行高の混雑を正し、家格に応じた知行高に復させることである。

四つは、これらの政策の実施に当たっては、家柄のある篤実の人物を要職に就けるとする。実質的には調所笑左衛門を中心とする人々により実施されるとしても、島津の家柄の重みにより政策を円

滑に進めることが意図したものである。

この安田の上申の内容はことごとく取り上げられたと安田自身誇っていることは、この史料の後書により知られ、同年より軍制の諸改革が積極的に進められた。

軍法は、薩摩藩でも取り入れられていた甲州流に代わり、貴久・義久・義弘の時代の軍法を基本とした合伝流が「御流儀」として採用され、砲術一般は成田正右衛門が「御流儀」の指南に当たった。

弘化四年七月以降、海岸防備掛・御流儀大砲掛の任命、大砲の鑄造、砲術稽古場の新設がなされ、人の配置と物の整備が進められていたが、十月一日には軍役方を設置し、軍役方名代島津山城・島津内匠、副名代島津豊後、軍役方惣奉行調所笑左衛門、同取次二階堂志津馬、同惣頭取海老原宗之丞の首脳部以下、諸書役までの軍役方掛を任命し、次のように達した。

仰出

家老中へ

旧冬於国許海岸防禦之儀申付、専大中様・貫明様・松齡様御代之御旧法ニ基キ致改正候儀、御軍法而已ならず其時分忠厚之風俗兼々奉慕候付、今般御廟御造営等為取掛候事ニ候、然ハ海防手当向は何程行届候共士気衰弱ニ有之候ては不用立、士之儀は平日礼讓を嗜、律儀を守文武之心得無之候ては、違変之期ニ臨ミ不覚未練之振舞も可有之候条、兼て廉節を不闕儀を第一ニ心掛、武士之本意不取失儀肝要ニ候、勿論數百年來太平之化ニ浴し、自ら世上驕奢遊惰之習俗相成、別て歎敷次第ニ候間、以來一統相励、面々質素節儉を用ひ、分限相応武器等用意致置、外寇隙を伺ひ候砌柄之事候条、万一不慮之儀於有之は速ニ出張忠勤を尽シ、家名を不

墜様常々可心掛儀專要二候、若旧染を不改不埒之所行於有之は屹と可及沙汰候、此旨篤と可申聞候⁸⁾

すなわち、軍法のみならず、貴久・義久・義弘の風俗が今に慕われていることが軍制を旧に復した理由であると先ず述べ、さらに、制度・設備が充実しても士気が伴わなければ用に立たないとする。士気を高めるためには、礼讓・律儀・文武の心得を持ち、武士としての自覚を高めることが大切であるが、長年の太平は武士を驕奢・遊惰の俗習に染まらせていると指摘し、以後は旧染を改めて、節儉に心がけ、忠義・奉公の道に立ち返ることを求めているのである。

具体的内容ではなく、武士の基本的嗜みを強調していることに、薩摩藩武士の抱えている問題の大きさが窺える。したがって、制度・設備の面と共に、人の養成、その基礎である文武の修練が藩の課題であった。藩の以降の方針は、この両面の質を高めることに向けられた。軍役方の設置後、武士の軍備状況の点検と実情把握が行われた。

『鎌田日記』によると、十一月九日「御軍役方武器並二御軍役相勤候節之得道具等家来足輕迄取調之差出帳一冊、今日鎌田喜平太殿より御軍役方へ被差出候事」と、武器および出動可能な人数が調査報告されているのであり、それは鎌田の地頭を勤める日当山郷はもちろん、鎌田の持切名である南村まで及んでいることから、「軍役方武器取調」が全領に渡って行われたことが知られる。また、鎌田は軍役方小姓と番頭という職務上と云うよりも彼の気質からのためであろうが、「是迄南村より招呼候番所詰屯人にて候得共、御軍役一件段々被仰渡候二付て武器等相調候へは、夫丈人入重且は鹿児島へ招呼置候へは諸稽古事は勿論、旁物習相成候二付、此節より両

人ツ、詰申付候筋用頼、相良清兵衛殿申談之上相究⁹⁾と、知行所より家来を呼び、鹿児島での武術武器の稽古に当たらせ、知行所へも武術の師範を派遣し、家来に稽古をつけさせた。この鎌田の行動は、武器の調査・武術の稽古等による緊張感の高まりにより、士気を高めるといふ藩の意向を忠実に体现していると云えるのである。これらの個々人の動きに重ねて、藩は、十月二十八日、吉野原の訓練、翌年、藩主斉興の大隅・日向地域への巡検の途中、福山牧内での砲術訓練を初めとする各郷での武術訓練などの視察を行ない、城下・外城での武の振興と士気の向上を図ったのである。

では、武と共に、もう一つの武士の養成の基礎である学問の面は、どのような状況であり、それがどのように変えられようとしていたのであろうか。

この点については、先にも触れたように、重豪逝去後の一時的な無風状態をへて、斉興の晩年には重要な課題として浮上してきたと云えよう。先の史料にあったように、武士の「士気の衰弱」・「驕奢・遊惰」が蔓延していた。これらは、武士の子弟に悪影響を及ぼさずにはおかなかったのであり、「風俗の悪化」が広がっていた。しかし、ここで指摘して置かなければならないことは、「風俗の悪化」を一般的に指摘することができるが、一部の、特に上級士の子弟は、文武両面にわたる研鑽を積んでいたことも指摘しなければならぬ。上級士の子弟全てがそうであるとは云えないが、将来重臣になることを自覚した一部の者は自主的研鑽に励んだ。しかし他方では、平士以下の子弟の多くは学問を軽蔑し、風俗悪化の風潮も広がっていたのである。

前者の例として、鎌田正純をあげよう。鎌田家は家格一所持格で

あり、正純は天保三年十六才で詰衆として出仕して以来、当番頭、奏者番、小姓与番頭、海岸防禦掛・御流儀大砲掛・御軍役掛・給地高取扱掛、側用人、大目付、若年寄格、家老名前による諸事取扱等を歴任し、最後は若年寄・御家老名諸事取扱として、実質的家老を勤めた⁽¹⁰⁾。

正純の日記は、天保三年に書き始められているから、丁度二才にあたる時期の、文武両面にわたる学習の様子を詳細に知ることができる。それは次の特徴的を持っていた。

1. 学習形態は、師による教授、独習、グループ学習である。

師による教授は、学習の初步の段階の素読・講釈と、より専門的な分野および武芸一般である。「今朝黒田氏へ素読へ差越」・「今日講釈式日ニて黒田氏御出」とあるように、朝、師と定めた家へ素読に通い、講釈の式日には、師が出向いて来ている。武芸の馬術・剣術・弓術・槍術・砲術は、師の出勤日に合わせて演武館での稽古もするが、師の家での稽古も式日・式夜を定めて通常なされている。

独習は、師について基礎的教育を受けた後、継続して行われる個人学習であり、素読・熟読・習字などがある。特に、正純は四書・五経を繰り返して素読し、それに続いて他の書物を熟読している。

正純の読書として頻繁に現れる書物名は、近思録・論語・礼記・孫子・孟子・唐鑑・小学・伝習録・古今集・詩経・書経・続太平記・大学・学部通弁・易経・十二朝軍談等である⁽¹¹⁾。

グループ学習は、数名の気の合う仲間による学習であり、一定の家を座元として、式日・式夜の日取りを決めて開かれる。その回数是非常に多い。天保九年、正純が書き留めた「式日式夜覚」は、次の通りである。

三七 犬追物

五十 同木馬、同夜 同書物

三八 夜馬乗方木馬

二六 夜馬乗方同書物

二六昼、八之夜 古実

十六夜 剣術

二六八 鉄砲

二八夜 会読、同素読会

四九夜 史読会、二月十四日より会読

七拾夜 史読会

四々夜 会読、二月十四日より

五十昼 素読、七月廿五日より

五々夜 七書読、拾月二十五日より

武芸までも含んでいるが、毎日何かのグループ学習がなされている⁽¹²⁾。

さらに新たな式日・式夜の企画も立てられることがあり、そのため式日等も「会読式夜五七二而候へとも、二五八二相替、五之日は咄迄之式夜二相替置候也」とか、「孫子読式夜五九二而候処、四之近思録会を拾二相替、九之唐鑑会を十二相替候二付、孫子会を四九二相替候事」とあるように、調整されることもあった⁽¹⁵⁾。

2. 学習内容は、自主的に決められたが、時には学習仲間との話合いの上で決められることもある。また、藩の治世上、または世情の変化により、学ぶ必要の生じた分野のものは積極的に取り入れている。

自主的な学習がなされていることは、新たな企てが自由になされていることに現れている。その例を次に示そう。

①先達而伊東主左衛門殿と歌読之式夜企置候二付、今晚被来之由候得とも、被帰候由二而候、式日は七々二極置候事⁽¹⁶⁾

②今朝より頼姓織部殿・山沢甚五右衛門殿・諏訪甚左衛門殿素読会相企、六ツ過より三人共二入来二而大学より相始候、尤四九之朝ニて候、中村仲右衛門殿ニも被出筈候処不被出候、左候て

五ツ比被帰候事、座元之儀は互ニ繰廻し筈ニ而候也⁽¹⁷⁾

③今朝より五々ニ孫子読之式夜森川孫八郎殿と相企、暮過より入来被致候而四ツ時分被帰候事⁽¹⁸⁾

④今朝五ツ時分青山善助殿入来、大筒入門方誓文書調、誓詞いたし候、鉄砲二篇ため方相習⁽¹⁹⁾

⑤池田仲太郎殿へ兵学入門いたし度旨、先日飯牟礼八郎殿を以申入置候処、今日可参旨奉、小野甚五左衛門殿大鐘前より入来ニ付、同伴いたし差越候而入門いたし、暮前迄相咄帰家⁽²⁰⁾

右にみるように、必要に応じて式日が定められ、学習活動は展開した。会読などのテキストの決定にあたっては、仲間の意見を取り入れることもあったことを次は示す。

一ハツ半比飯牟礼八郎殿入来、暫相咄被帰候、尤拙者は迄相会候近思録講義相断、外四書五経等熟読いたし度趣意ニ而、昨夜相談いたし候へ共、飯牟礼氏同意無之ニ付、得と相考候処、拙者疎見之所より右通之事ニ而、飯牟礼氏被申処、尤ニ而候間、本々之通相会取違之儀則相改候段断申置候、左候而是迄座元繰廻ニ而候得共、上方杯へ相掛り、座元繰廻し候而是当世之事ニ而、色々異字之様杯相唱候而是却而終を不能大成、志し有之者ハ不知之事ニ候間、座元此方へ相究置、差支候折は外方へ相頼候儀は如何可有之哉と申談候処、飯牟礼氏至極同意ニ而、又之式夜ニ而皆々申談相究申合置候事⁽²¹⁾

近思録之会読に鎌田が反対し⁽²²⁾、四書五経を熟読することを提案したことに対し、飯牟礼が反対し、結局は近思録の会読を続けることに決着した。しかし、一旦は飯牟礼の意見に賛成し、自己の考えを引つ込めたが、これはやはり不都合なことになる恐れが予想された

と推察される。大部後のことになるが、「会読之儀は是迄近思録ニ而候得とも取止、亦之時より集儀外書之筋可然と申談其通相替候事⁽²³⁾」と、近思録の会読中止を行っているからである。

このように決められた学習内容は、場合に依つては、「毛利理右衛門殿へ拙者共唐鑑読之式夜並ニ此内より諏訪甚左衛門殿杯取会之論語読式夜相企、出席相頼考ニ而参候⁽²⁴⁾」と、師と頼む人に指導を依頼することもなされた。

以上見てきた鎌田の学習活動は、当時の上級士の学習活動の中でも極めて熱心に行われたものであると云えるのであり、これを上級士一般の程度して敷衍することはできない。恵まれた階層、高い目的意識という条件を身につけた人物の学習活動であるということができよう。上級士の通常の学習程度は、次の天保十年の史料に明かである。

家柄之面々心掛薄成長之後は遊芸ニのみふけり御用立者無之候ニ付、学文武芸修行いたし、非常之急変等も候折は、一廉御用立候様ニとの御趣意ニて候、尤先祖代より一所之地領来候者は猶更心掛可有之、以来心掛薄二三代も家格相当之御用不相立面々は家格被相下、一所知行等可被召離との趣ニ而候⁽²⁵⁾

上級士である家柄の面々へ、用に立たない者は家格を下げ、知行を取り上げると云う脅しを懸けることにより、学文武芸の修行を励行させる状況であつたのである。恵まれた条件にある武士の多くがこうであるとすれば、経済的にも恵まれない平士以下の通常教育程度は予想しうるものであり、それによる「風俗の悪化」もまた肯首けるのである。

では、平士以下の「風俗の悪化」は、この時期どのように現れて

いるのであろうか。具体例を示そう。

① 櫓の木ば、二而帰りニ与力・足輕共拙者共通候折不図石をなげ候二付、即叱付名前承届候処、其内一人与力坂口仙太郎と申候二付、支配頭へ可相届之間左様相心得候様申付相帰候、然処右仙太郎親甚助此方役人山次七右衛門迄参、偏二断と申候間聞届置候段申聞置候事²⁶

② 大鐘過辺見仲太殿・岩元直之進殿一刻入来二而候、尤去ル十八日夜野月荒田二而小二才衆猥り之体二而、多人數徘徊いたし候処江行掛候付、其場叱置候処、辺見・岩元ニは右方限之衆故為挨拶入来有之候付、別而為入念旨返答いたし置候也²⁷

③ 六組支配下之者共酒食等無故取はやし猥りケ間敷候付、屹と右様之義相慎候様申聞、尤取締向行届候様昨日御家老衆石見殿より、同役島津権五郎・川上龍衛承知有之候由、右二付今日何れも出勤いたし候様問合有之、右取締向之儀共同役中申談有之候事²⁸

④ 此比一統酒・焼酎等取はやし、就中年若二才揚り之面々猥り之風俗相聞得不可然事二付、向後屹と右様無之風俗立直り候様ニとの趣二候事²⁹

右にあげた例から、身分格式をわきまえず、上位の者へ対し無礼な行為にでる者がいること、六組支配下の平士の間で酒食を取りはやし、猥りの振舞いにでる者がいた。特に二才の者は、猥りの風俗で夜行徘徊の行動にでていることが知られるのであり、藩はその取締りに乗り出しつつあったことが窺える。

では、これらの行動に対し藩はどのような対応をしていたのだろうか。

先に天保十年の「仰渡」により、家柄の者への学文・武芸の奨励がなされたことをあげたが、文武の奨励・風俗の取締りは、家柄の者のみだけではなく、武士一般への指示として事あるごとに出されていた。

『鎌田日記』に次のようにある。

一家来、中間供婦り之節家来は、御殿内は勿論下馬先迄半股立、中間以下供成之姿にて不敬之義無之様、尤町人以下壹本差之者共、手笠・齒付下駄・履物華緒等急度被差止候旨稠敷大目付衆より仰渡有之、横目見聞をも被掛置との事候付、召仕候家来下人は勿論外家来迄も役所江招呼右之趣急度申付置候様役人休左衛門江申付候事³⁰

一昨朔日御家老衆島津壹岐殿より大番頭並二我々共月番市田右近・桂内記承知之趣有之、支配下少し年丈候二才之内、郷中之事等七話いたし候丈之者、川村甚八・税所悦之進・同徳之助・種子島正八郎・野村藤八・児玉助太郎、且島津要人組より永山清右衛門・大河平彦六・西田次右衛門召出、芍薬之間縁頼にて申渡右之趣は、此比演武館諸稽古之掛声大守様御休息所江不相聞得、就而は士風衰、諸稽古事等も取止候半と被為在御沙汰之由、御家老方二も被恐入候仕合二付、是より屹と相励一住二而不取捨、年輩之不及沙汰出精いたし、士風勢ひ立候様教諭可致との事候付、其通い細申達候、勿論武芸迄二無之学文之義も同様申渡候事³¹

前の史料は、身分格式に応じた礼儀を守り、上位の者へ対し無礼の行為がないようにとの指示であり、横目による取締りを命じている。上位の者への不敬の行為が多いことを窺わせ、先に見た鎌田へ

石を投げつけると云うような、あるいはそれに類似する行為は、滅多にないような行為ではなかったのである。

後の史料は、演武館よりのかけ声が聞こえないことを土風の衰えと心配した斉興が、そのことを家老へ伝えたために、郷中の二才の中で、指導的立場にある者を城中へ呼出し、文武の出精を命じているのである。

また、容貌については、次のようにある。

一容貌の儀は応身分二、夫々年輩相当二髪月代衣服正敷、毎朝未明二相仕廻、其上髪結之儀も手髪二て無之候へハ、分二おひてハ差支も可有之候二付万端心掛、急速之御用何二而も相勤候様、且は身分違へ不粉様可相嗜候処、近代士分之者共髪形少ク、髪形相応有之候而も結様不頓着之者も有之、第一士は内心二強勇を含ミ容貌等乙名敷、律儀相守候こそ当然二て候処、甚心得違之儀二而就中月代中剃迄剃通し、つかなく候而は甲冑解髪相成候節之弁も無之、別て不嗜之事二候、且古来は本結製作等も家内之者共至極相清、武運を祈製作いたし候ものの由候処、近來は右之下風も薄相成、旁士道之嗜無之、尤衣服之儀も質素節儉之御趣意二基き、成程致僇服候儀は勿論に而候処、間二は不頓着之為躰二て罷居候者も有之、僇暴輕薄を強勇之様心得違之習俗以外成儀二候、乍然容貌之外見飾江戸外方之風儀等二相習、美麗過候様成立候而は却て身分違二も粉敷、御趣意二も相戻り事候間、容貌言語共相応二於何国二も御国風を不失様心掛候儀
題目二候³²

内に強勇の心を含み、外見はおとなしい身なりをし、律儀を守るこそこそ武士のあるべき姿であるとし、当時、薩摩藩の二才の容貌や

「僇暴輕薄を強勇之様心得」るような習俗を厳しく批判する。しかし、また一方、江戸等の藩外の華美な風儀も好ましいものではないとする。薩摩の兵児二才の見苦しい容貌・風儀を是正しなければならぬが、それが行き過ぎて、華美に過ぎないよう抑制することも大切であった。

以上のように、藩主および藩の意向は、士身分の中でも格式の差を明確にし、それぞれ格式にふさわしい見識を養い、礼儀を身につけさせることであつた。容貌・風俗の是正は、そのための第一歩であつたのである。したがって、これらについては、『鎌田日記』にも、弘化三年「御領国中風俗沙汰之義尚又仰出有之」、弘化四年「此節風俗沙汰之仰出有之」、嘉永元年「大小身風俗沙汰二付仰出」と、風俗についての沙汰がなされたことが記されている。

しかしながら、藩よりの「仰出」や「達」のみでは、それを実現することは困難であつたことは、同様な「仰出」・「達」が幕初から出されていることによつても明らかである。藩主および藩の意向・意向を躰した者が、いかにそれを藩士へ徹底させるかが重要であつた。

藩士への文武の奨励や藩士の風俗の取締りは、小姓組に例を取ると、番頭―組頭―小組頭という藩の統制組織、支配組織を通して伝達され、実施されるが、直接その任に当たるのは、云うまでもなく、藩士の実態を知悉している小組頭である。しかし、小組頭は実務の執行者であり、独自の裁量による奨励・取締りを推進することにはなかつた。組頭は、一人で三ないし四の小組を束ねているだけに、小組の状況に目が届くと共に、その中間な立場から、自己の裁量による方法で藩の意図・意向の実現を可能にしていた。したがって、組

士へ藩の意図・意向を徹底させる度合は、組頭の力量に左右される面が大きかったのではないかと考えられる。

鎌田正純の小姓与組頭としての活動を通し、藩の意図・意向の実現の努力を窺うことにする⁽³³⁾。

藩の意図する文武奨励、風俗の立て直しと云う目的を実現するための活動は、組頭が共通して行っている活動、云うならば義務としての活動⁽³⁴⁾と、独自の裁量によつ活動がある。

前者には、「角入前髪取見分」・「容貌見分」・「毎朔之御条書弘方」・「仰出」等の伝達等がある。

角入は半元服、前髪取は元服の行事である。実質的には小組頭が見極め、その上で、組頭がそれにふさわしい人物であるかを見極めることになっている。この行事が武士の子弟の統制に役立つのは、元服により諸役所の書役助等の役職に就く資格を得ることになるので、下級城下士にとっては生活の問題であつたからである。

容貌の見方は二才に対するものであり、鎌田の支配する小与では、年二回程の割合で行われており、容貌見分けの後、色々の教諭を与えている。

「毎朔之御条書」の制定は、島津光久の時になされた。これには幕法と共に薩摩藩独自の法令を内容として含んでおり、毎月朔日、支配頭等は城中で拝聞することになっていたが、一年に一回行われるだけで、形式に流れているとの批判も出されていた。『鎌田日記』によると、城中での拝聞の後、それを支配下の者へ読み聞かせている。

「仰出」等の伝達は、

一今度御発駕前御領國中風俗沙汰之義尚又仰出有之、其上大目付

衆列座ニ而我々共承知之趣有之、今四時小与頭一小与より兩人ツ、宅江御用ニ而召出、質素節儉を心掛、年若之面々は学文武芸相励、追々御用立候様、尤無益之参会等いたす間敷との趣相達、一小組二書付一通ツ、相途候事⁽³⁵⁾

一昨七日大小身風俗沙汰ニ付仰出且諸士若年之者共教導方ニ付大番頭・御小姓番頭へ被仰出趣も有之候付、拙者支配小与中江申渡方一小与より小与頭耆人ツ、今朝五ツ半時宅江召出相達筈候処、山口四郎太迄一人罷出、税所徳之助・税所十五郎兩人四ツ時迄不罷出候付、四郎太迄相達候、左候而出勤、右兩人出候ハ、御殿之様可罷出旨跡江申付置候処、四ツ後御殿江罷出候付兩人共相達、且郷中之申談も一統行届候様可取計旨上井甚七・種子島正八郎・税所悦之進・三島嘉七郎・橋口助右衛門・長谷場助七・染川伊兵衛・永山清右衛門江相達候⁽³⁶⁾

二つの史料により、藩の「仰出」等が組頭を通して、小組頭へ伝達されていることが分かり、その伝達に洩れがないように注意が払われている。このような細心の心配りで伝達するのは、鎌田の手柄に負っている面もあり、その意味で、これは次に述べることにも関わっている。

後者は組頭の人柄により差が大きいと考えられる。藩の意向を最もよく反映させていると考えられる鎌田の活動を次に見よう。

鎌田の独自の活動と見られるものは、(一)組士や組子弟との頻繁な接触による細かな指示・指導、(二)学文指導、(三)郷中活動の点検、である。

(一)は次の通りである。

一大鐘過より上井甚蔵殿・飯牟礼八郎入来、四ツ時分迄相咄被帰

候也、

但上井江は当分西田方郷中、過半は拙者支配下ニ而候付、折角風俗等宣様方万事心入可有旨、委細ニ達置候也³⁷⁾

一今晚森山嘉七郎・種子島正八郎・税所悦之進相招、森山氏は差支外兩人暮過より入来、尤正八郎・悦之進ニは拙者組小与頭ニ而未ニ才咄ニも出會之衆故、西田方郷中一体之風俗宜学問武芸等相励、追々上様御用ニ罷立候様ニとの意趣巨細申含候処各納得ニ而、五ツ半比迄相咄罷歸候事³⁸⁾

郷中の二才咄等にも出席している小組頭の来訪を利用し、又は、わざわざ招いて、学問武芸の奨励と風俗の取締りについて話し合っている。これは時間をかけていることから、上意下達的な形式的ものではなく、武士の心得等も含めた懇話がなされたであろうと推察される。

(二)の学文指導は次のようになされた。

一今日より桂岩次郎殿宅へ、毛利理右衛門丈相頼講義相初候付、八ツ後より森川孫八郎殿入来、同道いたし参り、外ニ聴聞人数西田方二才衆段々来会ニ而候、左候而七ツ過帰家、供川村貞助ニ而候事

但講義式日一ヶ月三度、こ、ニ相究候事³⁹⁾

本来、仲間内で行う学習会の中で、鎌田が師と頼む毛利の講義を、西田方限の二才共へ公開し、二才の聴聞を許しているのであり、造士館での教育に積極的でない二才にも、本格的な学問の機会を与えているのである。この学習会は継続したが、二才共の参加は必ずしも多くはなかったことに、二才共の学文への熱意の程度が窺える。

(三)の郷中活動の点検は、次の通りである。

一今朝児玉助太郎殿江用向ニ付申遣一刻入来ニ而候事

但西田方示現流内稽古星帳月々見届候筋相究、跡月星帳先日被差出候付見届、右助太郎宅座元之由候付折角出精有之候様、尤星帳江支多面々は別段沙汰いたし置候事⁴⁰⁾

一今朝上井甚七殿一刻入来ニ而候、且児玉助太郎殿入来ニ而候、尤助太郎殿ニは西田方郷中示現流内稽古星帳持参ニ而候付、一統無油断出精有之候様、其外風俗沙汰等旁巨細申諭置候事⁴¹⁾

郷中の活動の一つの柱になっている剣術の稽古への出席を点検している。「跡月星帳云々」とあることからすれば、毎月、先月分の出席簿の点検がなされていたようである。出席の悪い者へは「別段沙汰」と、個別の指導がなされていた。出席簿を持ってくる郷中の指導的立場にある者からは郷中の状況についての報告・相談がなされ、またこの機会に「風俗沙汰等」の指導もなされたのであり、郷中の活動は鎌田の監視下にあったことが知られるのである。⁴²⁾

このような鎌田の独自の裁量による活動は、支配下へ影響を与えざるを得ない。特に、郷中については、先に述べたような指導により大きく影響を受けたことを次は示しているのであり、西田方郷中に関しては、郷中は大きく様変わりしたのである。

一西田方郷中一件ニ付税所源左衛門殿・市来清十郎殿・永山清兵衛殿・曾木権之助殿等被申談、中年幼年之者共迄も一統士道相嗜風俗正敷有之候様相達置候処、一統申諭有之汲受宣、式夜等も相重め、即今晚より桂岩次郎様宅へ座元相付候間、拙者ニも一刻致出席、尚又一統江申諭呉候様承り候付、夜入過より差越致申渡⁴³⁾

これは、鎌田の器量による面も大きい、これが実現するのは、文

武の奨励・風俗の立て直しという藩の方針が立てられていたことによっている。弘化四年軍役の方の設置に伴い、文武奨励・風俗の立て直しを進めるとの方針が改めて確認された。

一八ツ後退出より川上龍衛殿入来、夫より頼姓織部殿・川上式部殿・島津隼人殿追々入来、調所笑左衛門殿草牟田別荘の方江招二付、七ツ時分より同道いたし参り候、合客海老原宗之丞殿ニ而与中之士風俗沙汰等之義共段々被相達趣有之⁽⁴⁴⁾

八ツより調所笑左衛門殿草牟田別荘へ御用之義有之罷出候様昨日二階堂志津馬より書付到来、頼姓織部殿・川上龍衛殿同道にて罷出候処、諸士容貌并二風俗沙汰之義被為在御沙汰候趣細々致承知、左候而緩々相咄候様との事二而、士踊等之義も内々取調候様致承知、種々振廻等義有之⁽⁴⁵⁾

右の史料から、調所の別荘での話合いの中で、士の風俗は重要な話題であったのであり、士気の振興の方策としての士踊も考えられていたことが分かる。これは、先出の安田助左衛門の上申書を受けたものと考えられるのである。⁽⁴⁶⁾

このような多様な方法により文武の奨励・風俗立て直しを図り、士気を高め、外圧に対応する軍制を打ち立てようとしていた。軍役高改正はこのための経済的柱であったが、精神面での立て直しは、以上見てきたように、進められつつあり、一定の成果をあげていたのである。さらに、この時期には実行には至らなかったが、士風の立て直しは、造士館教育の改革を含め検討が進められていたことが知られる。その意味で、次の史料に注目したい。

造士館教授ハ格別人才御撰、御役格側役次席、尤最初ヨリ御側役ニテ教授勤ヲ被仰付、追々勤功ニ依リ御側御用人・御番頭迄

迄ハ位階昇進被仰付、助教ヲ御記録奉行次席・訓導師ヲ是迄之助教之御役席被仰付、左候テ最初幼年之内ハ御国文等ヨリ教習シ、夫ヨリ神儒交教シ、且和漢之武学世界一統之事情ニ通達セシメ、諸文章・和歌等之技芸ニ至迄夫々ノ生質ニ応シ教へ、道徳言行兼備之モノハ夫々位ヲ揚ケ、一能一芸ノモノモ亦其職々ニ進メ、衆知一和スル様ニ教導被仰付、尤江戸御屋敷内ヘモ学館被召建、助教・訓導師官ヨリ一人ツ、詰被仰付、外方需者ヘモ付会専実意講求イタシ、勿論御屋敷内詰人数并二定府之モノ共モ右助教ヘ相付致修行候様被仰付候ハ、追々人才モ出来候半ト奉存候

一江戸学館之義モ隔日講義聴聞被仰付、番頭・御目付中ニハ勿論、御家老出席モ被仰付度候

一江戸御屋敷武館モ格別ニ被召建、毎月御番頭見分御目付出席被仰付、中ニハ御家老見分被仰付度候事

一御国・江戸演武館之義モ尚又実用ニ基キ士気致興張候様御取扱仰付度候事

一以前ヨリ郷中ト唱来候更ニ⁽⁴⁷⁾尚又文武館被召建、一所持以下之諸士之子孫慈童之内ヨリ出席、方限造士館勤之者ヨリ教訓方被仰付、最初御国文等ヨリ教方イタシ、仮令造士館出席之者又欠失スニテモ右之透ヲ以致出席、左候テ以来造士官并二郷内文武修練之席ニ於テハ、寄合以上子弟モ家柄ヲ以テ不相交、或ハ道徳或ハ芸能又ハ年長之者ヲ以テ席順トイタシ候様被仰付度候

一諸士之内困究ニテ造士館出席調兼候モノモ有之候付、是迄為御救諸座重書役助被召入候ヲ、此節ヨリ造士館出席被仰付、書生共ヘ、右御振替稽古扶持被成下候ハ、一涯相励、第一人才教

育之御取扱、尤究士御救之筋モ相貫キ、旁御徳沢ヲ可奉蒙存候⁽⁴⁷⁾右では、造士館の教授以下の待遇を改良すると共にその教育内容の変化を求めている。これは、江戸における文武館の設立とその内容の実用性ということからして、同様の改革を意図したものと云うことができる。また、郷中でも、文武館設立と、そこでの教育の必要を説いており、そこでは、家格や幼長の序を明確にすることになっている。最後に、困窮士の救済法として諸座の重書役助を止め、造士館に出席する困窮士へ稽古扶持として与えることを提言している。

このように、この史料では、次に述べる斉彬期の諸改革についてその基本が提示されているとみることができるのであり、斉興晩期にこのような提案があったことは、少なくともこの分野では、斉興期と斉彬期には断絶性ではなく、その継続性に特徴があるといえることができる。

(未完)

注

(1) 『鹿児島県史料 斉彬公史料』二一四五九。以下本史料引用の注記は『斉彬公史料』と略記する。

(2) 『鹿児島県史料 島津斉宣公史料』一九一。この史料は年次未記載であるが、編者は文化十年と推定している。以下本史料引用の注記は、『斉宣・斉興公史料』と、略記する。

一此節大御隠居様被遊御下向、御領國中風俗ノ儀付細々被仰出候趣夫々奉承知通候、右付四家並御家老ヲ始一統家督ノ者ヨリ御請書血判ニテ差出、末々至り候テモ其頭立候者ヨリ全断差出候様、左候テ右之趣家々ニ書留後代ニ至候テモ、聊忘却致間敷旨被仰出候条、別紙案文ノ向ヲ以夫々御請書相認血判ノ上、支配頭等へ相付可差出候、此旨向々へ不洩様可申渡候、
但血判ノ儀付テハ、追テ何分可申渡候

十月

右近
将監
安房

(3) 『斉宣・斉興公史料』五〇四一六。

(4) 『斉宣・斉興公史料』五四七。この史料には若干の疑問が残る。『鎌田正純日記』によると、弘化三年二月四日の項に、

今日は吉野御関狩御旧式ニ付立方被仰付、朝六ツ過より打立、吉野庄屋役所へ参、小奉行別府十左衛門其外山見廻書役御用人座書役上村正兵衛・平田直之助出会、左候て吉野原御棧敷之場へ出張、旧式相済、拾匁筒為打引取

とあり、関狩が旧式の通り行われている。安田の上申が行われた未年は弘化四年であるから、関狩の復興が上申の結果であるとするこ

とには問題が残る。また、嘉永三年の史料(『斉彬公史料』一一四〇)に次のようにある。

士小踊・御関狩之儀故三位様(重豪公)無御抛思召之詔被為在、是迄興行御差延之所、今形ニテハ御作法不連続可相成、殊ニ諸士泰平之代振ニ習染、武備心得薄ク成立候テハ、屹度不相濟事候処、此節士小踊・御関狩興行被仰付候、就テハ士小踊・御関狩共以前通稀ニ致張行、一旦其節限ノ事ニテハ御作法致連続兼、其上旅行等難罷出者モ可有之候ニ付、旁別段思召之詔被為在、一往士小踊ハ勿論、御関狩之儀モ御下国之節々、御城下ノ儀ハ、六組ノ内先ツ一組ツ、連々繰廻致張行、御軍備調練方行届、御作法致永続候様被仰付候、尤士小踊之儀、於川尻砂揚場等興行被仰付儀モ可有之候、左候テ何篇是迄御流儀砲術(高嶋流トモ唱)調練之以準合、手軽御取扱被仰付候旨被仰出候条、難有可奉承知候、

五月二十三日

将曹

右によれば、嘉永三年まで、関狩・士小踊が行われなかったとも読み取れるのであり、年次の推定に問題があるようである。

(5) 本文に引続き、次の記載がある。

右前条旁ノ次第追々申上置候処、給知高御改正ハ勿論、五ヶ条ノ御手当向、士小踊・御関狩・勲功ノ家筋御取立等ノ儀迄不残、夫々御取扱被仰付候事

しかし、これが其通りであるかについては、関狩再興のところでは触

(6)

れたように、事実関係については更に検討の必要がある。

貴久・義久・義弘期の軍法は、「御家法」と称されていたが、甲州流の採用によりその流派は絶えた。文化期に、徳田昌興は「御家法」を基本とし、中国の兵法や、日本古来の軍制を加味した軍法を合伝流と名付け再興した。そして、合伝流の採用を求め、他流を激しく批判したために忌諱に触れ、流罪に処せられ、その後は「御家法ヲ学フハ密ニシテ有志者慨嘆ニ沈ミタリ」という状況にあったのである。市来広貫は、「齊彬公ハ御家法御回復ノ尊慮積年ノ御志望ナリシト雖時機至ラサリシニ、今回父公ニ親述セラレシニ公御同感、改革ノ諸事御委任、調所広郷ニ命セラル、ニ、少将公ノ御指揮受クヘキ旨命セラレシトナム」(『齊宣・齊興公史料』五四八)と、合伝流の再採用の推進者は齊彬であるとする。『齊彬公史料』二一八〇には、五月二十七日に調所が齊興の命を受け、伊地知季安の旧記六十余冊を御用部屋へ出させたとあり、この旧記は「天正・慶長ノ御先代ノ御軍制ニ関ル書類ナリト云フ」と市来は注記している。この注記通りならば、齊興が「御家流」の軍制に関心を持ったことは明かであるが、齊彬との直接のつながりは明確でない。市来は「御家流」の推進者が齊彬であると主張するのであるが、齊彬が藩主となった後の嘉永五年の記述では、「末川近江ヲ召シテ、洋式砲術研究スヘキ旨、或ハ古式ノ実用ニ適セサル旨親諭セラレ、成田正右衛門父子及ヒ門人田原直助・木脇嘉左衛門・岩下新之丞等ニ就テ学フヘシ云々ヲ親諭セラレシト云」(『齊彬公史料』一一二六)と、古式は実用には適さないと述べたのであり、一貫性を欠いているようにも思われる。したがって、これに関し齊彬の信奉者である市来の言のみで史実とすることは留保しなければならない。しかし、合伝流が採用されることとなり、藩士間では関心が高まった。鎌田正純は、天保十一年よりこの流派の師である池田冲右衛門へ入門し、式日を定めていたが、さらに『鎌田日記』には、弘化四年五月廿四日には「平田奎右衛門殿方へ所持之合伝流兵学之書追々借用いたし度追田甚五左衛門殿存命之内より申承置候付、源助殿・直之助殿ニも甚五左衛門殿為ニは甥之続キ、奎右衛門殿ニも無拠統キ合之由候付、右三人相招龍岡備綱伝巻今晩借用いたし候」と、兵書の借用がなされ、十一月七日には、川崎四郎左衛門が招待されている。川崎

(7)

の招待は「四郎左衛門殿ニは合伝流兵学亡池田仲太郎老より皆伝之人二候間、右指南等受度旨申入候処受合ニ而、一ヶ月六度一六之日ニ式夜相究候」と、合伝流入門のためであった。

成田正右衛門を御流儀砲術指南とすることにより他の流儀が排除されるのではないかと懸念があり、特に青山千九郎の天山流一派の抵抗は強かった。しかし、他流の排除は行われず天山流も藩に取り立てられていたが、「御流儀成田正右衛門へ御預之大砲へ千九郎殿ニも御入門被致候様御前より御内沙汰之趣」とあるように、他流も取り込む動きも見られる。結果として、これは成功しなかったが、御流儀砲術を基本とする方針が藩主導で積極的になされた。『鎌田日記』によりそれを窺うと次の通りである。七月八日、川上式部以下六名を御流儀大砲掛に任命し、稽古について「年若之者共多人数之事候間、士風不乱折角行儀正敷律儀相守候様厚申談、致指揮」とが命ぜられる。七月十日、御流儀大砲掛の者全員が御流儀へ入門。八月二十日、御流儀大砲稽古場成就、稽古始め。十月二十八日、吉野原にて、御流儀砲術訓練を家老見分け。

(8)

入門者は「御流儀砲術之儀ハ、海岸御手当向肝要之事柄ニ付、深以思召被召建御城下諸郷迄モ追々御入門被仰付、殊更御備組惣鉄砲被仰出候付テハ、組中之面々一統御趣意之程汲受吃ト励合可致出精候」(『齊宣・齊興公史料』五六二)との指示に従い、城下士のみならず外城士まで広がっている。嘉永元年十月二日付の『鎌田日記』には、「於出水并二近郷且菱刈七ヶ郷之人数凡三千人程御流儀へ御入門有之」とあることに、その一端が窺えよう。

(9)

『鹿兒島県史料 旧記雑録追録 八』一五三。以下、本史料引用は『追録』と略記する。

(10)

『鹿兒島県史料 鎌田正純日記 三』嘉永元年正月元日。以下、本史料引用の注記は『鎌田日記』と略記する。

(11)

芳即正『鎌田日記 一』解題。

(12)

四本健光『鎌田日記 二』解題。

『鎌田日記 一』。天保九年の式日・式夜の内、最も熱心に正純が出席したのは、会読、素読、史読会、剣術、犬追物である。また、素読・会読に多く利用された書物は、孟子・中庸・小学・書経、ついで大学・論語・易経・詩経・春秋・礼記・近思録であり、左伝・靖

献遺言も用いられた。

(13) 『鎌田日記 一』 天保八年四月二十九日。

(14) 『鎌田日記 一』 天保十年五月十四日。

(15) 式日・式夜の多さと、新たな式日の設定などにより式日を忘れることもあったようである。天保九年十月二十四日条には「島津新一郎殿入来二而今晚は集義外書読方相企置候式夜二而候処、拙者二は毛頭取忘居、内記殿二も御入来為被成事二而、此方二而は読方相統兼候様有之候二付、村田源右衛門殿宅二而読方被成度申候処村田之様被参候也」とある。

(16) 『鎌田日記 一』 天保六年五月二十七日。

(17) 『鎌田日記 一』 天保八年正月二十四日。

(18) 『鎌田日記 一』 天保九年十月二十五日。

(19) 『鎌田日記 一』 天保十年四月十三日。

(20) 『鎌田日記 一』 天保十一年六月二十三日。

(21) 『鎌田日記 一』 天保十年十一月六日。

(22) 鎌田が近思録に反対した理由ははっきりしない。単に理由としてあげていることだけではなかったのではなかろうか。天保八年の日記に、「会読之儀は色々世評も有之候二付、先暫は取止之筋二申合、今晚より取止之筈二候事」(四月二十二日)とあり、会読自体に厳しい目が向けられていた時もあったが、それ以後も会読を中止してはいないから、会読自体の問題ではなく、むしろ近思録が文化朋党事件に連座した者の愛読書であったことと関係しているのではなかろうか。会読の座元を繰廻すことが、なにか良からぬことを企てると見られるような空気が当時有ったことが窺え、近思録の会読により「異学之様杯唱」える集団とみられることを恐れたのであろう。

(23) 『鎌田日記 一』 天保十二年閏一月晦日。

(24) 『鎌田日記 一』 天保十一年十月五日。

(25) 『鎌田日記 一』 天保十年十月十六日。

(26) 『鎌田日記 一』 天保十二年二月廿六日。

(27) 『鎌田日記 一』 天保十五年八月廿二日。

(28) 『鎌田日記 一』 天保十五年十二月晦日。

(29) 『鎌田日記 一』 弘化二年正月七日。

(30) 『鎌田日記 一』 弘化二年六月十三日。

(31) 『鎌田日記 一』 弘化二年七月三日。

(32) 『追録 八』 一三五—一。

(33) 鎌田正純は天保十三年八月、奏者番より同役を兼務のまま一番小姓与番頭に役替えとなり、小与一番より三番の支配頭を勤めた。任命時には、小与八番より十一番の支配頭であったが、鎌田の住居近くの小与支配を希望して支配替えとなった。

(34) 六組支配下の平士の取締りは組頭の権限下であり、特に大多数を占める小姓組を束ねる小姓組々頭の責任は大である。組頭の権限は宝永期の六組体制の改編と同時に大幅に拡大され、組士および子弟の風俗・行動の善導に責任を負っていた。

(35) 『鎌田日記 一』 弘化三年二月十日。

(36) 『鎌田日記 三』 嘉永元年七月十日。

(37) 『鎌田日記 一』 天保十三年九月十七日。

(38) 『鎌田日記 一』 天保十三年十二月三日。

(39) 『鎌田日記 一』 弘化元年七月廿六日。

(40) 『鎌田日記 一』 弘化三年八月八日。

(41) 『鎌田日記 三』 弘化四年十月廿四日。

(42) 郷中全体にわたり鎌田は関係していた様子が次により窺える。

西田方郷中一件二付申達儀有之、二才衆へ被参候様申知候処、種子島正八郎・和田六郎殿・永山清右衛門殿・和田中之丞殿・税所悦之進殿入来二付、細々申合候

(43) 『鎌田日記 三』 弘化五年正月廿四日。

(44) 『鎌田日記 三』 弘化四年十月廿日。

(45) 『鎌田日記 三』 弘化五年正月十二日。

(46) 士踊については、市来広貫は嘉永朋党事件批判をかわすために再興したとするが、本文によれば、朋党事件前に話し合われていたことはまちがいない。市来の説では、事件の後の対応策として士踊を考えていたことになるが、果たしてこれは正しいのだろうか。考察の要がある。

(47) 『斉宣・斉興公史料』六六二。この史料は、嘉永二年の部分に入っている。六六二は鎌田正純の日記抄であるが、日記の本文にはこの史料は入っていない。その意味で問題のある史料である。さらに検証して利用しなければならぬと考えつつも、ここでは誤謬を恐れずに、試案的に論ずることとする。